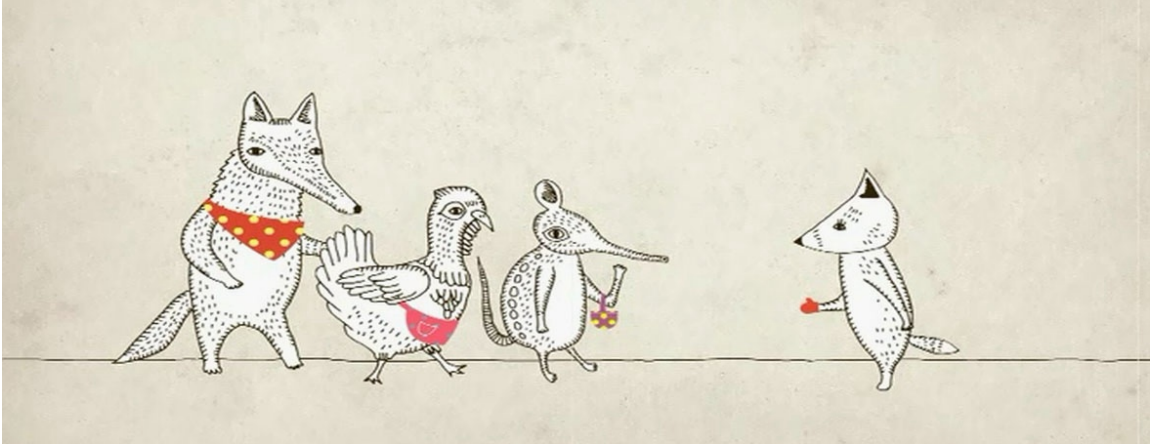


魔法の帽子



1 鳩

「茜ちゃんは、本当に動物が好きなのねえ」と、町子先生が言いました。

私達の学童保育園は、小学校の一階のはしの空き教室を使っています。だから、窓から運動場が見え、学童で飼っているニワトリ小屋が見えるのです。

「毎日、茜ちゃんが来て、小さい子や、ニワトリ達と遊んでくれるから大助かり」

「でもお母さんは、もう五年生だから勉強が遅れてしまうと心配でしたよ。それに学童では不登校の子に、ニワトリや、小さい子の世話をさせてるって言う人もいます」

「大丈夫よ。学校なんか行かなくても、学童に来ていれば友達も出来るし、第一ピーやポーだって喜ぶじゃない。私は学校なんか大嫌い。子供たちより親の意見を大事にする先生も大嫌い。学校の先生の話聞くより、ここで子供たちや動物たちと話をしているほうがよっぽど勉強になるわ」

ピーとポーというのはニワトリたちの名前前で、町子先生がつけました。小学校の教員を目指している私と、今年還暦を迎える先生とは、時々意見が合わないこともありますが、私はこのちょっと変わった、町子先生が大好きなんです。

実は、このニワトリたちは、ヒヨコの時は茜ちゃんの家で居て、それが段々大きくなって、もうアパートでは飼えなくなって、それで学童に連れてきたのです。

その時校長先生は、学校の敷地内で勝手に動物を飼ってはいかんと、町子先生に言いました。ところが先生は六年生の隆男や良太に手伝わせて、学童の前の運動場の隅に小さなニワトリ小屋を作ってしまったんです。それを見た校長先生は、もうカンカンに怒って、先生たちを集合させて、鶏小屋撤去の命令を出しました。でも学童の子供達は全員スクラムを組んで、一カ月に渡る先生達の攻撃からニワトリ小屋を守り抜き、それが今年の春の出来事で、長い夏休みの間に立派に成長したピーとポーは、今はもう悠々と運動場で遊んでいます。時々、校長先生の部屋まで押しかけ、校長先生を追い掛け回したりして、私達を悩ませることもあるのです。

その日、私は女の子達と一緒に、ハロウィンのお祭りに使う仮装の衣装や、カボチャ大王の道具を出して点検をしていました。町子先生や子供たちが大好きなので、十月の終わりの日の夜に、みんなでお祭りをやるんです。

「これ、魔女の帽子ですね。先生が魔女の仮装をしたら、絵本に出てくる魔女にそっくりだって、隆男が言ってましたよ」

「そんなこと言ってた。じゃあ、今年は魔法のほうきで空を飛んでおどかしてやろうかな」

先生は楽しそうに、魔女の帽子を被って、子供たちとおかしげな踊りを始めました。

その時です。隆男と良太が慌てた様子で帰ってきて、部屋に入るなり叫んだのです。

「大変や！ 鳩が死んだ！ 良太が鳩に石を投げたらあたってんや」

「違う。僕と違う。鳩にあたってんは隆男の石や」

驚いて隆男が手に包んでいるものを覗いてみると、そこには羽根が取れかけて動けない鳩が、懸命にもがいていました。町子先生の黒い帽子が揺れました。

「隆男、先生のいうことを忘れたの。生き物をいじめないって。良太、先生と約束したでしょ。生き物を殺さないって。忘れたの。じゃあ、先生にもう一度約束して、もう決して弱いものや小さなものをいじめないって。決して殺したりしないって」

すると突然、茜ちゃんが、先生の前に来て言ったのです。

「動物を苛めないって約束したら、この鳩を助けてくれる？」

「茜ちゃん、何を言ってるの」

「鳩を助けて、先生、鳩を生き返らせて！」

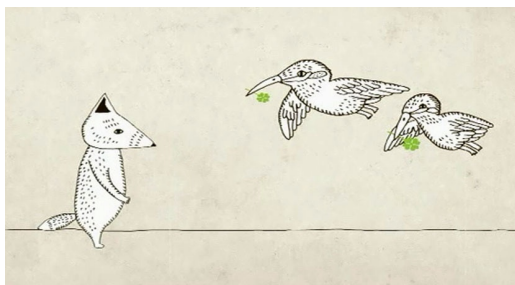
私と先生は「アッ」と叫んで顔を見合わせました。そうなんです。子供たちの大好きな絵本の中の魔法使いのおばあさんは、魔法の帽子を使って死んだ小鳥を生き返らすのです。

私は隆男の手から鳩を移すと、絵本に出てくる村娘のように言いました。

「おばあさん、魔法使いのおばあさん。あなたの魔法でこの鳩を生き返らせてくださいな」

すると先生は、黒のつば広の帽子の中に鳩を入れて暖かく胸に抱きしめました。

それから優しく鳩を放しました。鳩は暫く部屋の中を飛んだ後、窓からキラキラ光る青空に向かって、ゆっくりと、でも力強く羽ばたいて飛んでいったのです。



2 . ニワトリ

事件が起こったのは、その冬最初の木枯らしが吹いた、とても寒い日の朝のことでした。

電話を貰って私が学童に行ってみると、校長先生と校務員のおじさん、それに町子先生がもう教室に集まっていました。

「ワシが朝ここに来てみると、鶏小屋の網が大きく壊されていて周りに血のついた羽根が散乱しておった。小屋の中を覗くとニワトリのメスが首を千切られて死んでいたんじゃ」

校務員さんの説明を聞きながら、私は寒さと恐ろしさで震えていました。

「だが、雄ニワトリのほうは小屋の周りを捜したが、何処にも居なかった」

「ピーの死体は見つからなかったらしいのよ」

「そんなもんは犯人が持って行ったに決まっとる。だいたい、学童はワシの言うことに反対するから、こういうことになるんじゃ」

校長先生は寒そうに、教室の床をドンドンと踏み鳴らして歩き回りました。

「犬やイタチに襲われたのなら仕方ないけど、人間の仕業なら許せない」

唇をかみ締めて、校長を睨んだ町子先生の目には、涙が光っていました。

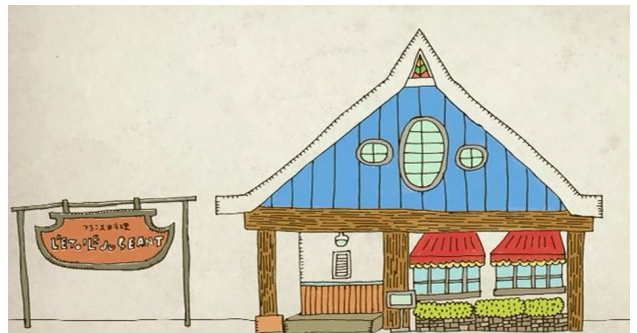
その日、学校が終わって学童にやってきた子供たちに、町子先生は「ニワトリは石上神宮に連れて行った」と説明しました。石上神宮は天理の古い神社で、境内にニワトリが放し飼いになっているので有名なんです。でももっと大変なことは別にありました。私たちはその時はまだ、茜ちゃんの姿が無いのに、気付いていなかったのです。

その茜ちゃんのお母さんから電話があったのは、私たちが学童の鍵を閉めて帰ろうとしている時でした。お母さんはすぐに学童にやってきました。それから私が隆男と良太の家に電話して、二人が学童を出てまま帰っていないことが分かり、大騒ぎになりました。町子先生は校長先生にも来て貰いました。校長先生が警察に電話し、三人の子供達が見つかって警察に保護されていると連絡があったのは、その日の夜遅くのことです。

三人は奈良の西にある生駒山の麓の町を歩いている時に保護されたのです。学童のある大和郡山から生駒まで、歩いて行ったということでした。

家に帰った子供たちは、どうしてそんな所に行ったのか、いくら聞いても何も言いませんでした。けれどもわたしには分かっていました。あの寒い朝の出来事を茜ちゃんが知ってしまったということ.....、そして隆男と良太が茜ちゃんの悲しみを知ってしまったということ.....。

町の人達はニワトリなんて代わりはいくらでも居ると言います。でも名前をつけて一緒に遊んだニワトリはやっぱり違う。だからあの朝、死体の見つからなかったピーだけでも実はうまく助かっていて、一人で遙か遠くの石上神宮に辿りついて、仲間のニワトリたちと一緒に元気に暮らしながら、私や茜ちゃんや隆男や良太、それから町子先生が会いに行くのを待っていてくれる、そんなことを考えてしまうのです。



一年後

それから、一年後の秋の日のことです。茜ちゃんのお母さんが、学童に大きな柿をいっぱい持って来られました。今年も茜ちゃんのお祖母ちゃんの家柿の木は、大豊作だったそうです。

今年の春に六年生になった茜ちゃんは、元のように学校に通い始め、もう学童保育には来なくなっていました。

「吉永さんと同じように、学校の先生になりたいって言うんです」と、お母さんに言われて、私は嬉しい半面、少し寂しいような気持ちもありました。そうそう、私はなんとか教員の採用試験に合格して、来年の春から小学校の先生に内定していたんです。

「最近、学校の先生も競争が激しくて、なかなか採用されないんでしょう」

「校長先生が教育委員会に推薦してくれたんです。学童保育で優秀な先生だからって」

「まあ、あの校長、狸だとばかり思っていたけどいい所もあるじゃない」

そう笑いながらお母さんは言って、

「そうそう、今日は、茜に頼まれてこれを返しに来たんです」

と、紙の袋から黒いピロードで作られたものを取り出しました。それは、町子先生がハロウィンの時に魔法の仮装に使った、あの魔法の帽子でした。

「あら、これ、この間から探していたんです。もうすぐハロウィンでしょう。そうなんですか。茜ちゃんが持っていたんですか」

「ええ、ずっと大切にしていたようです。でもどうしてこんな物を持っていたのか教えてください」

すると、その時まで黙って聞いていた町子先生が、

「茜ちゃんはズツと待っていたのかもしれないわ」と、言いました。

「お母さん覚えています？。一年前のあの寒い朝のこと。ほら学童の鶏小屋が襲われた、あの時私は子供たちに、ニワトリたちは天理の石上神宮に連れて行ったと言ったけど、茜ちゃんはニワトリが襲われたことを知っていたんです」

「茜が可愛がっていたニワトリでしたからね」

「でも、茜ちゃんはニワトリたちはきっとどこかで生きていたんじゃないでしょうか。傷ついて、でも生きるために自分を訪ねてきてくれると信じていたんです」

町子先生は、帽子を手にとると祈るように言いました。

「これは傷ついた小鳥や生き物たちを生き返らせる魔法の帽子」

「だから茜は、その帽子を持っていたんですか」

「でもあんな寒い日に、どうして子供たちは生駒山なんかに行こうとしたんでしょう。石上神宮とは反対の、西の方角なのに」

「ほら、子供たちの絵本に書いてあったじゃない。生き物を生き返らせる魔法は、西の森の向こうの、丘の上に住んでいるって……」

